

# 伊呂波

シテ 空海の霊

ワキ 菅好治

ワキツレ 同伴者

所 京都東寺

時 三月下旬

ヲトコ「か様に候者は洛陽に住居する。菅の好治と申者に  
て候。今日は弥生後の一日。大師御入定の会式な  
れば。若き人々を倡ひ東寺へ参詣仕候。

サシ「実や仰ぐも辱なや。四十八字の偈にいはく。

立衆「去ば咲花の。色は匂へど散ぬるを。我よたれぞ常  
ならむ。有為の奥山今日越て。あさき夢見しゑひ  
もせず。京童を始とし。我日の本の宝となり。三  
国伝来の。書籍に通用す。殊に言葉の其内に。無

常を進め睦しき。大慈大悲ぞ有難き。く。

詞「急候程に。是は早東寺に着て候。皆々かふ渡り候  
へ。

シテ、サシ「夫尺牘の書疏は千里の面目也。凡六の文は体の姿  
を顕はす輩。驚鸞反鵲の勢ひを習ふ人。纔に一字  
をなして万代の誉れをいたす。諸道に勝れし筆道。  
貴みても余り有は。遍照金剛荒有難の御事やな。

ワキ「いかに是なる老人。御身は此辺の人か。

シテ「不思議やな。かほど群集の其中に。分て詞を懸給ふは。何の御用の有やらん。

ワキ「さん候。是は洛陽に住者成が。何れも手跡をたしなみ。分て大師の御筆の跡を。及ばずながら学ぶ故。道を祈りて折々は。参詣申者成が。唯今御身の詞の末に。筆道の不可思議なる事を宣たまふは。同じ願ひの人やらんと。尋申さん其為に。そ忽に詞を懸申す。御心にあはず共。若きにゆるしおは

しませ。

シテ「扱は誑しくも手跡に心を入る人とか。我も此寺辺に年を経て。老せまりたる上にても。手跡を学び申也。皆々も信心私なくば。能書と成給はん事疑ひあらじ。たゞ怠らず学ばれ候へ。

ワキ「実有難き御詞や。又承はれば大師は。我朝のみか漢土迄。其名隠れぬ御事よなふ。

シテ「中々の事。入唐渡天ましくて。御智恵をためさ

れ筆道をならひ。三国に御名をかゞやかし。和朝の誉れを顕し給ふ。

ワキ「御身寺辺の人ならば。猶も大師の御事を。委御物語候へ。

シテ「元来旧記にとゞまれ共。御尋にて候程に。懇に語り候べし。

クリ、同「抑大師と申は。金剛三知の薩埵にて。唐土にては恵果にま見え。天竺五台山にては。正身の文殊菩

薩を拝し給ふ。浅からぬ大師にておはします。

サシ「唐土にては五筆和尚と号し。我朝にしては三跡のかみに立給ふ。

同「其頃嵯峨の天皇の御宇に叡慮として。唐土和朝の手跡をあつめさせましくて。筆道に御慮を。尽させ給ふ。

クセ「或時御門は空海を。内裏に召れ此間。異朝より名翰の。卷物朝来せり。日の本に能書多く共。異国

には及ばずと。宣旨あれば。空海は。巻物を披見ある。是は我入唐の砌に書たりしと。勅答有ければ。帝いぶかしく思召。支証有やと。叡問なされしかば。則軸を放せば。日の本の沙門空海筆と顕せり。帝猶も覚束なく。然らば此ごとく書ずして。異やうなりと宣旨有。

<sup>シテ</sup>「大師勅答ましますは。

<sup>同</sup>「漢土は大国成故に。文字も相応の形ちなりと。答

へさせ給へば。帝叡感浅からず。夫より空海を信じおはしまし。大内裏御造営。十二門の其額。南面は大師。西の三つは小野の良記。北は橘の巨勢麿。東の三つは嵯峨の帝。垂露の点を下して。天下の眉目驚怖せり。然して小野の道風。大師の御分律を。難じて朱米と名付。嘲ける権筆を。そしる科にや忽ち。道風手ふるひせし事。偏に誹る科とかや。心に信なき故ぞ。只正直に修行せよ。

我空海と宣ひ。御厨子に合せ給ひけり。く。

後シテ

「我過去七仏より以来。番々出生し。今日域に結縁ふかく。其名は高野に入定し。弥勒の出世を待といへ共。衆生済度の思ひふかく。真言秘密の窓の前に。三密の月を澄し。蛍雪にうそふいて。書經に眼をさらす。有がたや。仏法流布の国なれば。神は高間が原に顕れ。仏は衆生の迷闇を照し。

同

「粟散辺土と人はいへども。仏法繁昌神国仏国。竺

土も唐土も争か我朝に増らんや。頼めや憑め信受せよ。

シテ

「昔日神国の御国の内に。

同

「邪の神霊を。千里の外にはらひ給へ共。其執眷属山々峰々嶽々に残り。閑ならず。殊に東夷西戎を治めん為に。魔山に分入。樹下石上に秘密を行へば。雲となり。雨となり。障碍をなせども仏力におされ。虚空に飛去。ならびに山上に水をふう

い。潮海の中に清水を出し。社頭を清め。殺生  
をとぐめ。秋津島根の風俗を和げ。仁義の道に返  
る車路。とぐろく道橋をふたたび修覆し。天下泰  
平。国土安穩。君も豊かに民安き。真言の法味  
ぞ有難き。

底本・国立国会図書館デジタルコレクション 『古今謡曲解題』 丸岡桂 著  
『宴曲十七帖 謡曲末百番』 国書刊行会 編